

必由館高校改革に関する意見交換会について

1 日時及び参加者

日 時：令和3年（2021年）12月17日（金）16時30分から17時30分まで

場 所：視聴覚室

参加者：生徒、教職員、同窓会、

遠藤教育長、西山教育委員、小屋松教育委員、苫野教育委員

（単位：人）

グループ	必由館高校			計	
	生徒	教職員	同窓会		
A	遠藤教育長	5	5	1	12
B	西山委員	5	5	1	12
C	小屋松委員 苫野委員	5	5	1	13
計		15	15	3	37

2 意見交換会の内容

- (1) 開会
- (2) グループに分かれての意見交換会（各校生徒等と教育委員）
- (3) 各グループで出た意見の共有（全体）
- (4) 閉会

※各グループの意見は2ページ以降に記載

Aグループ(遠藤教育長)

(教育長) まず、教育委員会の案と、それから学校の案と両方出てきているわけですけど、それぞれ皆さん、生徒さん、同窓会、教職員の方含めてですけど、この辺が一番のポイントというか、こだわりというか、そういう部分があれば。元の原因と変わっている部分は、人数はもちろんですけど、普通科を残す、36人学級にする、附属中学校については慎重に検討する、そういったところが変わっているかなと思います。どなたでも結構ですけど、特にここについてこういう思いがあるとか、こだわりがあるとか、特にこれを言いたいというようなことがあったら最初に伺っておきたいと思うんですけどいかがでしょうか。例えば普通科という名前を残したい、普通科を残したいという生徒さんからの要望として非常に強かったんじゃないかなと思うんですけど、これについてはどうですか。何か考えがあれば聞かせていただいてもいいですか。

(生徒) まず当初の案が、グローバル探究科ということで、私たちの初めてこれを見たときの率直な意見がグローバルのことしかできないのか、そういう学校になっているのかという風なイメージを受けました。そこで私たちは今、普通科という名前でやって、私たちが入学したときは普通科という名前です。いろいろなことを学びながら大学進学を目標に入学してきたので、今、中学3年生の子たちがこの名前をみたときに普通の勉強ができないのではないか、大学に進学するのは難しくなるのではないのかというイメージをもって入学者の低減などにつながるの嫌だと思ったので普通科っていうのを提案させていただきました。

(教育長) 普通科は大学進学を目指す科だというイメージが、普通科ではなくなるとなくなってしまいう気持ちが強いのですか。

(生徒) グローバルになると国際的な学校になるとか、それが目標じゃない人は入学できない気持ちになると思ったのでみんなが入りやすい普通科。今この必由館もそういうところが人気があるのかな。入学率が高い理由なんじゃないかなと思ったのでそのほうがいいなと思いました。

(教育長) 普通科で進学を目指すということで、今おっしゃたことは非常によく分かると思うんですけど、これから先、少子化で子どもがどんどん減っていった時に、必由館だけを考えたならそれがいいかなという風に思いますけど、例えば県立高校があるわけですよね。普通科もいっぱいあるわけですよね。その県立の普通科との違いといたしまして、熊本市立という学校をこれからも維持していくために県立と違う特色がないといけないんじゃないかということで元々の案を作っています。これから今のこどもの数の何割か少しずつ減っていくわけですよね。その時にどうやったら県立との違いを出して必由館が人気を保っていただけるのかということが、みなさんとしてはどの辺が特色というか強みだと思っていられるのか、やいますか。

(生徒) 特色がなくあまり違いがないということですけど、必由館は偏差値でいうと50よりちょっと上とか平均ちょっと上ぐらいだと思うんですけど、中学3年生の時に大学を見て必由館に決めたんですけど、必由館入りやすそうだな、大学にもいけそうだな、他の高校よりもんかちょっと敷居が低いというか、入ってそこからでも頑張れそうだなと思えるところが、他の高校とは十分に違いが出ていると思うので、やっぱり必由館を無理に変えて、中学

の人たちが必由館ないからちょっと上とか下とか変えないといけないなとかそういうのなくなるんじゃないかなと思うので必由館の今の位置で十分違いが出ていいと思います。

(教育長) 無理に変えるということを考えているわけじゃないんですけど、どうやったら人気を保てるかとかそのところなんですよ。今おっしゃったのは敷居が低いってというのはどの辺がそう思われますか。偏差値ですか。

(生徒) そういう感じですね。やっぱりテスト、難易度とか。

(教育長) そんなに高くないけど大学に頑張ったら行けるんじゃないかという位置づけですか。

(生徒) 第一とかになるとちょっと厳しいかもと思ったり、北高は遠かったりだとか。けど、やっぱり必由館はいい位置にあると思うのでこれは十分、強みなんじゃないかなと思います。

(教育長) 他のみなさんもそういうイメージですか。

(生徒) 市内にあって交通の便もいいのでそういうところが必由館の強みです。

(教育長) 場所は確かに、一番ではないけど強みですよ。

(教職員) ちょっと似た同じ意見で、私のこどもも中学生で、市内の北の方の中学なんですけど、そうすると選択肢は市内の普通高校というと濟々鬘か第一か。北はちょっと遠いです。それと必由館。うちが濟々鬘や第一になりたいかという話なんですけど、ほんとそこにいける子たちはトップのトップなんです。その次ぐらいの子たちが必由館に非常にきやすい、交通の便もいいし、少し頑張ったら必由館にきたいというような感じです。高校生は車を持っているわけじゃないので、どこにでも、じゃあ県立高校はどこにでもありますよと、第二高校もありますよ、熊高もありますよ、レベルもあるし遠いし、どこへでも行けるわけではなく、中学校も中間位置のこれぐらいの層が頑張ると入れるというところでは人気があるのかなと思います。

(教育長) 場所によってももちろん選択肢はだいぶ変わってくるでしょう。その中でちょうどいい位置にあるというそういうことですね。

(教職員) 悩ましいところは、うちにもトップ層が来てほしいというわけですね。悩ましいところがあるのは確かなことではあります。

(教育長) 先生方としてはどうでしょう、必由館の特色とか、今の強みというのは、もちろん場所とか、入りやすさというのはあるのかもしれませんが、どの辺でしょうね。

(教職員) やはり3つのコースですね。私は芸術ですけど、元々県立から縁があってこちらにきて18年関わっていますが、非常に芸術は上手くいっているという自負はちょっとあります。非常に県内でも知られた存在になっておりますし、進学も、受賞的なことも、どこに出ても恥ずかしくないような生徒たちが活躍をしていて、ぜひ、残ってはいますが、一本で残していただけたらというのが望みではあります。

(教育長) 一本ですか。

(教職員) 服飾と一緒になくて。

(教育長) これは芸術に関してはそう違わないのかなと思っています。名前として2クラスになってますけど、中身を一つのクラスずつに分けることが当然できるでしょうし、別々の名前にしてもいいとは思っているので。芸術に関しては、今とそんなに大きな差はないのかなという風に思うんですよ。実態としても全員が一つの美術なら美術を選ぶわけじゃないでしょうから。芸術コースは、年によって倍率が低い年も高い年もあって、安定しないのもあるのか

など。

(教職員) あれは絶対数がすごく減っているので県立高校の美術科も定員割れすることもあります。他のところももう定員割れをどこもしています。絶対数が足りなくなっているのに、定員をちょっと減らすというのはありかなというのは、それはもううちだけじゃないんです。

(教育長) 定員、倍率が維持できればいいですよ。ただ今おっしゃったように定員割れして倍率が下がった時に、高校はどこもそうですけど、都道府県がつくっていますからね。市立ってなんで必要なのっていう。県立があるのに、さらに市立がいるんですかという話になるのが、我々としては一番困るんですよ。だから倍率が保ててますよということにならないと。あと、私立は当然私立でやってらっしゃるでしょうから、私立があつて県立があつてプラス市立っていうのはなぜ必要なのかということこれから言っていかなければいけない。私たちとしては、当然こんな人気があつて、こんなニーズがあるから市立高校が必要なんですよということを言わなきゃいけない。まずそれが大前提で、そのための方法が何ですかというだけの話だけなので、どの案でも最終的に倍率が高く維持できればいいと私は思っているんですよ。必ずこの形じゃないといけないと思ってるわけでは全くない。ただ、どうしたら倍率が維持できるかという方法の議論なんですよ。そういう意味では、生徒さんがこういう学校がいいという学校が一番倍率が当然維持できるだろうという風に思うんです。それが、今みなさんは当然ここを選んで入ってきたわけですから、そうなんでしょうけど、この先、子どもがもう少し減っていても今のままでも大丈夫なのかと。今のままでも大丈夫だという確信が得られれば、今のままでも全然問題ないと思います。変えないほうが倍率高くなるよという皆さんの意見だとそうだと思う。そこが本当に大丈夫なのかなというところが知りたいなというか、話が聞きたいところなんです。そのためには、さっきおっしゃったように場所とか偏差値とかの問題で、ちょうど必由館に来ている人たちが、今後別の選択肢がなくてずっと必由館の存在が、今のままあつた方がいいということだったら、必要とする生徒がこの後もずっと一定数いますよということだったら、安心して私たちもこれでいいと思います。もちろん少子化に合わせて少しずつ人数は減っていかなければいけない部分はどうしてもあると思うんですけどね。必由館だけ定員を維持していくというのは、それは倍率が下がっちゃうので。だから、今日はいらっしゃるから生徒さんからどういう風に必由館が見えていて、なぜここを選んで、これからは例えば5年後の後輩とか、今の中学生とか小学校の高学年の人とかも選んでくれるかというところを、できればこの5人に一人ひとりに是非話を聞きたいと思っています。

(生徒) この案だとグローバルな探究科とのことなんですけど、やっぱり必由館の9割は進学しているということで頑張って必由館に来た人たちがこぞって大学に行こうとしているんですよ。これがもし、グローバルな時間が増えて授業数が減ったとか、授業に身が入りづらくなる、グローバルをしなくちゃいけない、勉強もしなくてはいけない、きつくなったときに、大学に進学する人が減ってしまった場合が怖いなと思っていて。それって熊本市で360人9割進学というのが減ったら、大学に行く人が少なくなりました、熊本で活躍してほしいから必由館の特色を出したのに、大学に行かず中途半端な人たちが就職して活躍できません、勉強して大学行った方が活躍できましたとなったら、それはどうするんだろうと思うんですけど。これはどうなんでしょうか。

(教育長) グローバルと勉強っていうのが別々のものじゃなくて、グローバルっていうのは将来の進

路としてグローバルに仕事をするということを想定した勉強なので、勉強の中の種類だと思っています。別に決してグローバル探究科は進学をしないというイメージではなくて、むしろ今の普通科と同じかそれ以上に大学進学を目指しているそういうイメージでつくっています。

(生徒) それは何で普通科ではなくて、グローバル探究科とか総合探究科とか名前を変えるだとか、魅力があります、特色出てますといいますが、今の普通科とあまり変わらずグローバルにしますよみたいな、ちょっとよく見えてこないんじゃないかなと思いますけど、変える必要あるのでしょうか。

(教育長) 最初の検討の時には、本当に普通というのがこれからの時代にあるのかという、一人ひとりそれぞれ違うよねということで、普通を目指すということがあるんですかねという議論だったんですね。特色がないのが特色ですみたいな風になるんじゃないかなということ。普通という言葉に対して非常にネガティブなイメージを議論の中では持っていたところがあるんですよ。皆さんの意見を聞いたら普通という言葉にすごくポジティブなイメージを持っているということで、そこはすごく違うなという風に思ったんですよ。だから正直一番最初の案をつくったときの議論の中では、これからの世界、普通なんてないよね、普通を目指すとかそんなことはないよねという議論があったんです。みなさんも普通の人になりたいって強く思っているわけでは多分ないと思うんですよ。普通科を残してほしいことと、自分が普通になりたいって別のことですよ。そこが最初にどういう人を目指すのかってということで、普通の人を育てる学校ですということではなくて、どうやったら自分が、自分の個性を伸ばしていけるかというところで、普通という言葉じゃないよねという話になったんですよ。皆さんが思っている普通科のイメージはたぶん大学進学を目指して勉強する科だっていうことで普通科という。普通の人間になりたい人たちが行く学校ですってというのはどうなのという議論で入ったんですけど、これは普通科という科の名前として認識されているんだなと思って。

(生徒) 自分は正直、大学に進学する普通の方がいいのではないのかと思います。

(教育長) 普通がいいんじゃないかと進学がいいんじゃないの？

(生徒) まあそうなんですけど、それが普通に進学しているグローバルって何みたいな感じっていうのが、似非グローバルみたいな人たちができてもどうしようもないんじゃないかと正直思う。

(教育長) 大学に行くところを見ているわけじゃなくて、将来大学を出たあと、どういう人間になりたいかということのを元々は考えている。大学進学して人生終わりじゃないんですよ。その先に当然仕事がある。

(生徒) なので、大学からでも色々やる人がいらっしゃるんで、とりあえず大学に進みたいという頭にある人たちはいて、大学に進んでからでも色々変えることはできますし、もちろん信念を持って大学に行くぞ、どこどこ大学に行くぞという人たちはいると思うんですけど、それは違うんじゃないかと思うんです。やはり大学に進学してから一回決めたいという人たちもいると思うので。東京大学とか、1・2年までは普通に学んで、3年からは医学部でちゃんと医学したりとか。そういうのとかあると思うので、そういう感じで一回大学までは行きたいみたいな感じがあるんじゃないかなと思います。将来とか一回見る前に、そこが大学のステップであると思うんで。大学進学というのはとても一つの大きな関門というかゴー

ルというかそういうのが実際あると思います。

(教育長) そこがなんていうんでしょう、最初の前提がすごい率直に言ってしまえば、とりあえず大学に行きたい人が行く高校ですというのはやめましょうというのが最初の議論なんです。だけど、現にとりあえず大学にいきましょうという子どものニーズがたくさんあるなら、むしろそれはそういうニーズがあって、その人のための学校というのもあっていいのかなという風に思います。そこはたぶん、どういう学校がいいかなという考え方の前提として、目的をもってこういう仕事をしたいからこういう大学に行きたいです、という人も当然いてもいいですね。とりあえず大学に行きたい人だけじゃなくて。とりあえず大学に行きたい人じゃない人のための学校にしましょう、というのが最初の案です。だけど、とりあえず大学に行きたい人にとって一番いい学校だからそれは残してほしいという、これからもそういう学校が必要だということだったら、それはなるほどそういうことかなという風に思います。考え方の違いというか、今みなさんおっしゃったように、とりあえず大学に行って、大学に入ってからその先の人生を考えましょうという生き方は当然あるでしょう。そういう人がたくさんいるというんだったら、今後もそういう人のための学校が倍率を維持できるでしょうから、そういう学校にしようというひとつの考え方です。一番最初の前提がかなり違って、今、小学校、中学校ぐらいからキャリア教育、自分の人生について考えて、そのとおりいくかどうかは別として将来的にこういう仕事をするとか、あるいはこういう高校に行くというのを考えた上でじゃあ大学・高校を選んでいきましょう。そういう風な考え方がありますよね。そういう考え方で最初つくったわけですね。だから、現実のニーズとしてどうあるかということと、将来的にどうしたいかという、理想と現実の違いなのかなという風には思います。あまり現実離れしたものをつくっても誰も来ないからしょうがないでしょうけど。でも現実として、今ニーズがあるからといって、この先もずっとそのままかどうかも分からない、両方あると思うので。みなさんの案だと、今、現にニーズがたくさんあります。その後、この先も定期的に何年かごとに在り方を見直していきます。そういう形になっているので、そういう方向性はあるのかなという風に思います。もしそれで今の在り方で倍率が下がってくるようであれば、それは見直していかなきゃいけないと思う。今の状況をずっと維持するというわけじゃなくて、何年かごとに必要に応じて見直す仕組みをつくります。これは本当にそのとおりだと思います。私たちの案がいいわけでも、みなさんの案がいいわけでも、それは何年か後になってみないとわからないわけですから。なってみてやっぱり違ったねと思ったら見直していくという観点が必要でしょう。だから私たちとしたら、もしかしたら、最初に考えた前提が、まだそのみなさんの実態と少し違っていいのかなという風に思っています。今のみなさんの必由館に入っている方と同じようなニーズがたくさんあるんだったら、当面このままこの案で、学校案でいつ3年なり5年後なりにそれでいいかどうか見直していく、そういうことはあるのかなと思います。まだお話をされていない、まだしゃべっていない方。

(教職員) ちょっとわたくし中学生の親なんですけど、まだうちの子も、高校に入っているいろいろ勉強して将来をみつけない、まだ決まっていなくていいんですよ。そのための普通科で幅広く勉強できるための普通科と。うちも普通科を考えているんですけど、それは本人のレベルに応じてですね。この改革案が出たときにうちの妻も教員なんですけど、なんて言ったかという「必由館、あんたの学校大丈夫ね？」と。うちの妻も同僚から教員から「必由館って大丈夫なの？」

とみんな言われた。だから、先生方の思いとすごく乖離しているんですよ。現場の感覚というか保護者の感覚が全く違うんですよ。伝わっていないんですよ。なので、もし倍率を維持したいということであれば、もうちょっと違う方法も、知恵を絞ってあるんじゃないかと。特待生制度を設けるとか特進クラスをつくるとか。このグローバル探究科をバーンと出すと、やっぱり一般の人には教職員含めて全く伝わっていないです。それが現状としてあります。

(教育長) まあそこはたぶん見方が全く違う人たちがたくさんいて、たとえば市役所、市議会でも、これがいいという意見が多かった。議会とは市民の代表ですから、一般の市民の代表の人からみたら、この元々の案のほうが大絶賛であったことは間違いないです。今学校に行っていない人たちですから、どちらかというともう大人の人たちですけども。

(教職員) 中学生とか保護者が反応しないと意味がないじゃないですか。

(教育長) 中学生や保護者の反応と、たぶん世間一般、仕事している人たちの反応が全然違う。学校関係者じゃない、一般の人からみたらこの案のほうが圧倒的に支持があったのは確かなんですよね。

(教職員) これから保護者と中学生が圧倒的に支持すれば、それはいいと思いますけどね。

(教育長) 中学生のアンケートは、一番最初にとってはいらんですよ。中学生は確かにまだはっきり決まっていないというところはあるでしょうね。まだお話しされていない生徒の方はいらっしゃいますか。

(生徒) 私は服飾デザインコースに入学をして、前期試験の面接の時に、私が一番必由館に魅力を感じたところが、普通科として大学進学も考えて勉強を学べるということの中に、私の趣味として服が大好きなので、服飾のことと両立して学べるところに魅力を感じて、実際にそれを面接で伝えて入学することができました。それをグローバル科ってということは普通科として同じ、最終的になることは一緒だと思うんですけど、その中で今までは普通科としての魅力で必由館が存在してたのであって、それが変わってグローバル科となると、捉え方はそれぞれ一人ひとり価値観は違うと思うので、入学がちょっと抵抗、どういう進路先になるのかということがわからなくなるのではないかと思います。

(教育長) わかりました。みなさんその名前、グローバルというところにすごいこだわってらっしゃるような感じなんですけど、ちゃんと案をみていただくと仮称だし、むしろ探究のほうがメインです。普通科目とか専門科目とか探究科目があって、探究の時間を増やしましょうという元々の趣旨の話です。だからグローバルというのは名前としてついていますが、国際的な視点をもってという意味でつけてますけど、中身を見ると結局、探究の時間、自分の好きな、関心のあることを探究するそういう科目を増やしましょうという趣旨で、グローバル探究科という名前をつけています。グローバルというところだけに、もし非常に抵抗があるということだったらそこはまだ仮称なので、別に名前はいくらでも選択の余地はあるかなという風に思います。普通科の特色で大学進学を目指す中で、趣味として服飾とかそういう選択をできるということは特色かもしれない。

(生徒) 私は現在国際コースに通っているんですけど、受験の時に周りの方々に国際コースということをお話すと、やっぱり国際コースは英語しかやらないのという感じで言われたり、周りの普通コースに通っている友人に本当は国際コースを受けてみたかったけど、親にやっぱり国際だと心配だよねと言われて止められた人もいたので、探究だったりグローバルだった

りすると、将来性を意識するとして普通科の方がいいじゃないかなと思います。

(教育長) 実際、国際コースは英語中心で大学に行けないということはないですね。だからグローバルでも名前は国際でも名前の問題であって中身の問題として大学進学ができないということとは全くないと思っている。イメージとしてはそういう風にみられてる。

(生徒) 周りからみるとそういう風にみられてます。

(教育長) わかりました。まだ発言していない人いますか。

(生徒) 探究というのは自分の好きなことを学ぶことができ、自分の好きなことに対してしっかりやっていけるのでいいと思います。実際好きなことを学ぶ時が一番自分の意欲とかやる気が出たりもするので、探究という部分は自分を取り入れてもいいのかなと思う。

(生徒) 探究が難しく、やっぱり高校で探究学科というのはまだみつかっていない人もいると思うので。

(教育長) 探究がみつかっていない？。

(生徒) 探究の学科でなくても、探究に時間をとられて、勉強を圧縮されちゃうし、部活もしないといけないし、結局大変なところがひとつ増えるし、ここで高校に持ってこなくても別に小学校、中学校のうちから、最初から「こういうの興味があったらしない？」みたいな、小中学校でもっと簡単なところから取り入れていって、高校では探究しやすいよねみたいな感じにしないと、中学校から入ってきて、いきなり探究します、興味あることやってと言われても、なんだろうという感じの人が、少なからずいると思います。やっぱり、必由館は今倍率もそこそこあって人気がある学校だと思うので、この後どうなるか分からないからいったん変えてみようっていうのはちょっといけないんじゃないかな。

(教育長) この後どうなるかわからないからいったん変えてみようということではなくて、このままだと倍率が下がるから変えようという話だったんですけどね。もともと。

(生徒) 定員もあるかもしれないですけど、それに伴い探究とかグローバルとかそういうところも入れようという、よくわからないものを知る必要まではないんじゃないかなと思う。

(教育長) 探究とかグローバルっていうのが勉強じゃないというイメージはどこからきていますか。勉強イコール受験勉強だと思っているということですか。

(生徒) はい、やっぱりそういう教育だと思っています。

(教育長) 探究も、もちろん勉強だと思うんですけどそうじゃないということですか。

(生徒) そうじゃないというか、なんというかなんとなく頭の中ですみわけがあるんじゃないかという感じがちょっと残ります。

(教育長) 勉強とおっしゃっているのは、受験のための勉強という、そのための時間が減ってしまうという意味でよろしいですかね。探究が勉強じゃないと言われたらそれは勉強ですよという風に説明しなきゃいけないんですけど、受験勉強に直接つながる教科の勉強という意味で言っているんですね。わかりました。

(教職員) 今まで私も15年間こちらでお世話になっているんですけど、生徒たちの実態で服飾デザインコースに服飾に興味があって入ってきたんだけど、やっぱり大学に行きたいといったときに今の受験システムでは、大学、例えば熊大とか国公立、私立大学に行くには普通科としての勉強の量がやっぱり減らせないんですね。実際、専門の農業高校、工業高校になりますと、受験のためのっていったらちょっと私あまり好きではないんですけど、そういう授業が減ってしまう、限られてしまう。そういう、専門学校に行きたいと思っていたんだけど、

大学にやっぱり行ってみたいという時に、今の必由館の状態であると幅があるんですね。本当に頑張れば可能性が広がるんです。ですので、私は普通科でも特色があって生徒たちがやりたいことをやりながら、色んな方向に多様な進路を確保できる学校だなと、とてもいい学校だなとも思います。ですので、特色があった方が、こういうことをするから行ってみたいって希望の子たちがもちろん嬉しいと思うんですけど、そこで後で希望が変わったからこっちに行きづらいという思いを生徒たちにしてほしくないですね。ですので、まず急にイメージとしてここだけっていうイメージがどうしても一般的にあるので、やっぱりそこは少しずつ5年間ぐらいみて、少しずつ変えていく方向でいったらいいんじゃないかと私は思っています。ただ、探究的な学習については物事を突き詰めていくというのは、とても大事な勉強だなと思うんですね。いろんなことを探っていく、自分に何があるかっていうのを突き詰めることはとても大事だし、深く知るということは大事だと思いますのでその探究というのを私はとてもよい勉強じゃないかなと思っています。そういう色んなところにいける可能性を子どもたちには持たせてあげたいなと、そういう風に思っています。急激な変化ではなくて様子を見ていただいて、せっかく必由館は、芸術コースも服飾デザインコースも国際コースの方も施設設備を整えていますので、うまく活かしながら変化をさせていく、特色を出していくという方向で考えていけないかなと思います。

(教育長) 変えないなら変えないで、ちょっとずつでも変えないっていう選択肢もありますよ。変えましょうと決めたわけではないので、全く変えないという選択肢もあります。無理にちょっとずつ変えなくてもいいと思いますよ。

みなさんの話を伺っていて、すごくよく分かったのは、結局大学進学の可能性を減らさないでほしい、そういうことはまず皆さんの共通理解、共通認識として最低ラインとしてあるでしょう。それは確かにそのとおりだし、グローバル探究科という名前にした時に進学を目指さない科とか、大学に行きにくい科をつくろうという趣旨では全くないわけですけど、そう見えるのだったら、そういうイメージの問題があるから変えていく必要があるのでしょうか。大学進学に不利にならないようにしてほしいということが一つと、入った後も進路の希望が変わるかもしれないし、色んな選択肢があるから選択肢が狭くならないようにしてほしいという。その部分はみなさんの共通理解として間違いなくありますよね、ということがよくわかります。同窓会から何かありますか。

(同窓会) あの私たちは専門ではないし、みなさんがやりやすいというか。すみませんちょっと長いかもしれませんが、ここが男女共学になった時、私のひとつ下からなんですけど、その時はその先生たちの思い、その時学校におられた先生たちがすごく男女共学が必要だって考えて動いてされたんですよ。今、この案が学校の中から出てきた案ではない。先生たちがすごくその必要性を感じてされたのであれば私たちは賛成しますけれども、だから現在携わっている、それと現在いる生徒が本当にしたい、今そのままがいいということであれば、同窓会はもうそのままがいいんじゃないですかというような考えですけどね。

(教育長) ちなみに当時どんな学校で、何で男女共学が必要だって強く思われたんですか。

(同窓会) 私は生徒だったので、詳しくはないんですけども、女性だけだと、競争力っていうか進学する力もだんだん減ってきて、確か入学の希望者も、私たちの時は3倍ぐらいあったんですけど、それも減り加減ではあるだろうと。なので、ここで絶対男の子を入れた方がいいだろうということになったみたいな感じです。

- (教育長) じゃあ、やっぱりだんだん倍率が下がってきているというような状況があったんですね。
- (同窓会) 下がってはいなかったと思うんですけど、普通科で3倍、被服科で2、3倍弱ぐらいはあったのではないかと思うのですが。ただ、女性だけだとどうしても大学への進学、熊大に行けないような感じになっているので、男子を入りたい。理数系の男子です。そのころは女の人は、理数系は弱いみたいなのという感じで。
- (教育長) 男の子が理系が多い？
- (同窓会) そうですね。だからその上の理系に進学するような子どもたちをほしい。そうすると、女の人も競争して上がるんじゃないかというような話だった気がします。
- (教育長) 女子校を共学にするというのは、今とは比べものにならないレベルのような大改革のような。
- (同窓会) 成功しているのです。だけど、それはたぶん中の先生たちが強い意志でされたからだと思うんです。だから、あまり何というかわかりませんがそんな感じです。
- (教育長) わかりました。先生たちが強くそう思っていないだったら、あまりやってもうまくいかないというところも確かにあるでしょうし。それは確かに、わかりました。
- (教職員) ちょっと言いたいことが、4つほどあったんですけども、まず倍率のことを最初におっしゃっていて、それは今までの倍率に甘えていた私たち職員の努力不足でもあったかなと思います。PR不足というか。
- (教育長) 倍率が下がっているわけではないので、甘えているということではないと思いますよ。
- (教職員) 2点目が探究について。グローバル探究科の。探究に関しては今度、新課程が始まりますし、はたから見るとゆっくりですけど研修も重ねておりますので、探究自体に関しては今色々な準備をして進めているところです。それから3点目、必由館の存在の意味というか位置づけというか彼らが言ってくださったような形で、この学校に来た時にちょっと感じたのが、中学校では取り立ててトップというわけでもない、どちらかという我真面目で問題を起すすわけでもない普通の、それこそ普通の子たちが、中間層の人たちが入ってきて、その子たちに先生たちが寄り添ってそして活躍の場がそれぞれこのようにあるということで、ものすごく3年間で成長している、成長できる学校だと今の必由館そうだなと思って、今日の話聞いて間違いないなと思っています。それが、必由館の今の存在意義というかその子たちが活躍の場があるという学校だなと。そして最後ですけど、進学について。これも外部から見るととりあえず進学とか数字とか見ると思えるかもしれませんが、とりあえずではなくて、その時一生懸命考えた結果がそういう風に思われているのかもしれませんが、見えているかもしれませんが、やはり職員がついて一人ひとりと相談して面談を重ねて最終的に、そんな風に進路を決めていったという過程があるので、「とりあえず大学」ということは言葉としてちょっとひっかかるなと思ってそれは申し上げときたいなと思います。本当に一人ひとりが一生懸命考えて選んでいる進路です。
- (教育長) 外からどう見えるかという話と、実際どうなのかというのは違う話でしょう。進学ということで言うと、例えばもう少し進学実績を上げるというような、そういう方向性もあるのかなと感じています。
- (教職員) すごく変革の波がきていて、来年から兼業禁止という方向も打ち出されるようですので、何らかの違う方法を模索していかなければならないんじゃないかと思うんですよ。校内兼業禁止という方向にいけますので、朝課外とかできないので、例えば習熟度別をやってみると

か、外部をいれてみるとかそういう模索は、このままでいいということはないと思います。やっぱり研究していかなきゃいけないのは当然のことだろうと思って。ただ、看板だけをちょっと掛けかえるのはどうかなと思って、中身の変革を当然のことながらやっぱりしなければならぬ時にきているのかなという感じはしております。

(教育長) 看板にちょっと注目が集まりすぎている感じがあるような気がしていて、中身は決してそんな看板だけではないんですけど。ただイメージというのは大事なんで、みなさんが、生徒が持つイメージが悪くなるだったらそれは確かに看板がよくない。だからそれは無理して看板をかえる必要はない。

【感想】

(生徒) まず、私たちAグループでは最初の改革案の認識の違いというのが少しあるなと感じました。こちらが普通科を提案しているのですが、普通科を私たちはそれがいい風にポジティブに捉えているんですが、教育委員会側からしては少し違った捉え方をしておられるという風に感じました。あと、グローバル探究などの一応仮称なんですけど、そういう名前に、少しとらわれすぎている風にもあるのかなと思いましたが、私たちも普通科がいいという強い思いがあるので、こちら辺はもう少し慎重に話し合っていきたいと思います。あと、必由館の位置づけ、偏差値や場所、必由館が県立、私立、市立の中で市立が要る意味などを話し合っ、必由館の魅力を私たちはもっともっと増やしていけないといけないと思いました。

(教育長) 今日は、このAグループで議論させていただきましてありがとうございます。このグループでは、附属中学校の話は全然なくて、主に普通科っていう、その部分についての話でした。話を聞くだけじゃなくて、意見交換ということで本当に真剣に議論ができたなと思います。みなさんの意見を聞いてよくわかったのは、まず大学進学の可能性というか選択肢が狭まらないようにしてほしいということが、最低限みなさんの要望としてはあるのかということと、入学した後も、進路も最初に入った時の気持ちと変わってくることもあるので、そういった場合にも、選択肢を広く維持できるようにしてほしい。そういう中で、どういう方向性があるのかということが一点。もう一つは、名前ですけど、グローバル探究科それから普通科という名前で、中身も大事ですけど、名前もイメージとして中学生や保護者から見たときにどう見えるかっていうイメージの問題も非常に大事だなと思いました。中学生、それから保護者の方に、先程少しCグループの話もありましたが、分かりやすいというか、認識してもらいやすい、理解してもらいやすい、中身を想像してもらいやすい名前にしていく必要があるんだろうなという風に思いました。その名前が普通科というのが一番いいじゃないか、ということがみなさんの意見だということもよくわかりました。今日は率直な意見交換ができてとてもよかったと思います。ありがとうございました。

Bグループ(西山委員)

1. 必由館のいいところ、改革案に対しての自分の意見について

(西山) まず、生徒の皆さんに率直な意見を伺いたいと思います。資料の5ページに比較表がありますが、現行と教育委員会事務局の案、それをもとにこちらの学校で検討いただいた学校提案というのが12月に出版されていますので、皆さん個人の意見を是非伺いたいと思います。お一人ずつ、この学校の素晴らしいところはこうだ、改革案に対して自分はこう思うといったことを、率直にお話しいただければと思います。

(生徒) 必由館のいいところは、普通科普通コース、国際コース、芸術コース、服飾デザインコース等、生徒のニーズに応じた特色があるコースがあるところです。国際コースでは留学ができたり、芸術では書道や音楽、美術などが学べますし、服飾デザインコースでは服のデザインも学べます。そこに惹かれました。

(西山) 特色を残してほしいということですね。あなたは何コースに在学しているのですか。

(生徒) 私は普通科国際コースに在学しています。

(西山) コロナ禍の中、留学はできませんが、Zoomで台湾の学校とやり取りし、満足していますか。

(生徒) 夏休みに行われたイングリッシュキャンプの代わりに英語学習会があり、そこでは、ALTの先生方がおられて、日本語禁止で英語の会話のみで交流しました。外国の方とのコミュニケーションが学べ、英語力もそこで身につきました。

(西山) 改革案に対して意見はありませんか。

(生徒) 改革案に対しての意見はありません。

(生徒) いいところは、必由館には、普通科の普通コース、国際コース、芸術コース、服飾デザインコースがあるところです。服飾デザインコースや国際コースは、高校生のうちから専門的な勉強ができます。私は普通コースですが、進路がはっきり決まっても、学習を進めるうちに進路がつかめるように、いろんなすべての教科を平等に勉強ができるところがいいところです。進路の融通性があるからいいです。改革案は、個人としてはこれを変えてほしいというわけではありません。探究コースとなっていると思いますが、グローバル探究科は、自発的に学習できたり、グローバルに活躍できる人を育成できるのがいいと思いますが、はっきり進路が決まっていない場合、自発的に学習するというより、先生方に導いて教えてほしい人にとっては、普通科が望ましいです。

(西山) 現在の普通科である進路の融通性が多少なくなる可能性があることを不安に思っているわけですね。

(生徒) 必由館は他の高校にない、服飾デザインコースや国際コースがあるので、そこに惹かれて入ってくる人がたくさんいます。ここ最近では必由館の受験倍率が高く人気校です。他の高校は定員割れをしていて、必由館は人気があるのか1.5倍以上の倍率をみてもわかります。今の必由館の普通科普通コースや国際や服飾等に興味を示している中学生が多いと思います。今の必由館を大事にしながら学校改革を進めてほしいです。

(西山) 改革案に対し、意見はないですか。

(生徒) ありません。

- (生徒) 必由館の良いところと感じるのは普通科が充実しています。私自身、1年が入ってきた当初は特に将来具体的な目標がありませんでしたが、3年になって様々なものを学ぶ中で、教員という道を志したいという具体的な目標ができました。必由館に導いてもらいました。普通科というのは、具体的な目標が決まっていなくても、導いてくれるキャリア教育が充実しているので、そこは必由館の良いところだなと感じています。
- (西山) 改革案に対して意見はないですか。
- (生徒) 学校改革案は、個人的な意見ですが、必由館は生徒が主体的に動いている学校だと感じています。そのような中で一番は生徒の意見を教育委員会の皆さんにもしっかり聞いてほしいです。お互いが納得して学校改革案を進めるのが大事だと思います。
- (生徒) 必由館のいいところは、大きく分けて2つあります。一つ目は生徒が意見を言って、学校改革とか校則とか、必由館をより良い学校にするために頑張っって変えようとしているところが必由館のいいところです。
- (西山) 生徒の主体性があるということですね。
- (生徒) はい。
- (生徒) 主体性があるのと、今の時代に合わないことを変化させていくことを積極的に行っているところです。
- (西山) 改革を主体的に行っているということですね。
- (生徒) もう一つは、それと同時に服飾デザインコースとか他の高校にない特別性のコースがあるところも必由館のいいところです。学校を変えたくて、特色のあるコースが変わったりなくなる可能性があるんで、個人的な意見ですが、この二つの必由館の良いところを最大限に発揮するには、残すべきところは残して変えるところは変える。ちょうどいいバランスを保つのが一番いいと思う。学校提案にある、いいところを残す、他の高校にはない特色を残す必由館を創りあげてほしいです。
- (西山) 私も生徒さんとの意見交換は2回目だが、生徒さんの意見はだいたい理解しています。基本的なところは普通科を残してほしいという点です。それはよく理解できます。普通科は、進路を考えるうえで、理系も文系にも行けるから、色んな進路選択はできます。学校生活3年間で進路を充分考えていくうえで、そういう意味で残してほしいということだと思います。もう一つは、服飾や芸術等、特色あるコースを大切に残してほしいことです。これもよくわかります。教育委員会の事務局案でグローバル探究科が強く出ているので、そこに不安を持たれたかと思います。説明が十分でなかったかもしれませんが、グローバル探究科でも理系に進学できるというカリキュラムを考えていくことができるという本来の案でした。普通科をつぶすという考えではありません。多少誤解がありました。服飾デザインコース、芸術コースも芸術探究科として守って残していくもので、考えて、改革案は創られたので心配しなくてよい。学科とコースに関してはそういうことです。大きな問題は、2つあって、1つは、少人数クラスにするという改革案です。なぜ少人数クラスにするかという、教育の質を高める目的が一つです。もう一つは、附属中学を創り、中高一貫教育をするという目的のために定員を減らしたというのが教育委員会の案でした。附属中学に関しては皆さんの意見から様子を見てからがいいという意見が多く、私もそう思います。学校内の敷地に新たに附属中学校を設置するのはいろんな制約があり、難しい面もあるというのも十分理解できます。ただ、中学校を後から設置するのは難しいです。現実的な案としては、竜

南中を附属中にとという考え方もあります。現実性があるかどうかはわかりません。教育委員会としては中高一貫教育という案をどのように考えていくかが今後の議論の焦点になってきます。附属中をどうするかが大きな議論になりますが、これは少子化に起因します。志願倍率が下がっていくと、学校自体を維持できなくなる可能性があります。高校でも、倍率が下がって定員を切って維持できなくなります。そうならないための改革案と思ってほしいです。今は、必由館の教育は成功できているし、倍率も維持できているが、あと10年後はどうなるのか心配です。10年後を見据えて改革を事務局は考えています。どういう方向で最終的に改革案を創っていくか、そういう事情を皆さんには理解してほしいです。先生方のご意見をお聞きしたいです。

(教職員) 改革は活性があっていいですが、コロナ禍の現状私が危惧しているのは、少人数学級は良いと思いますが、急激な募集定員の減少は問題です。当然少子化に対応していかなければなりません。クラス数を変えずに少人数にしてはどうかと考えます。中高一貫にするなら、教室のキャパから考えると、高校のクラスを減らさなければいけません。急激に減らしすぎです。また、現段階は高校の改革をまず先に進めようと考えています。高校の改革だけで先生は手いっぱいです。まず、高校の改革をやるために、クラス数を減らさずに少人数学級がいいのではないかと。

(西 山) 確かに高校の改革をまずやって、中学を進める意見もわかります。ただ、中高一貫教育の良さというのを捨てがたいのもあり、中高一貫によって新しい特色が出せる可能性もあります。その点は中高一貫教育を取り入れるのならどう進めるのか、そこら辺は慎重な議論が必要です。同窓会の方はどうですか。

(同窓会) 現場の先生や生徒の意見を尊重したいです。進め方の中身がよくわかりません。改革は人・モノ・金、投資がいります。その辺がよく見えないところがあります。今の校舎を使って、新たな投資をしないという話も聞きますが、中途半端で失敗に終わる懸念があります。改革は結構ですが、基礎ベースを固めて進めてほしいということをお願いしたいです。

(西 山) 基本的には大きな設備投資ができないのではないかと考えています。附属中学を創るにしても、新たな場所に土地を確保して、新しい校舎は無理だと思います。学校の中に新しい中学校を創るか、竜南中を新しい附属中にと考えることもできます。そのような選択になると思います。その辺が一番難しい点です。人に関しては、教員の問題ですから、教員の確保も必要です。必要ならば要望していかなければいけません。改革が煮詰まってきましたら、当然考えないといけません。指摘の通り、理念だけで走っても、人・モノ・金の問題をクリアしないと上手くいかないと思うので十分考えていきたいです。

2. グローバル探究科について

(西 山) これから先は自由討議で先生方も含め、率直な意見をお願いします。グローバル探究科に違和感があると思われるが、みなさん、どういう印象ですか。

(生徒) 普通科と国際コースの中間かと思いました。普通科でないのかと思いました。

(西 山) 普通科と国際科の中間のイメージで、なんとなくどっちつかずでイメージしづらいですか。

(生徒) 英語に特化するわけでもなく、多様な領域を学ぶといっても、中間地点なのかなというイメージです。

(西 山) 中途半端でイメージしづらく、不安があるということですか。

(生 徒) 今までの普通科でなくなるのではと思います。グローバル探究科の名前だと、これから入学してくる生徒が、「どんな活動をする科なのかははっきりわからない。」と思います。

(西 山) 中身がイメージしづらいですか。確かに、その辺のイメージができていないというのがあると思います。将来の進路にしても本当に理系に行けるのか、グローバル探究科では、英語ばかり勉強するのか、そういったイメージがあるのだと思います。その点は説明が足らなかったという感じは受けます。

(教職員) グローバルな学びで国際的に活躍することも大切ですが、今から先はローカリズムでもあり、地域に密着した根付く視野も大事と考えます。グローバルだと制約されないかと心配です。

(西 山) グローバルな名前だと制約されてしまいます。地域に根ざした教育も重要ではないかと思えます。

3. 目指す学校像について

(西 山) 改革を進めていく上で、どういう学校像を思い描きますか。例えば、熊本高校、済々黌高校に匹敵、あるいは上回る学校にしたいとか、進学校か特色ある学校かという点で考えたらみなさんはどっちがいいですか。

(教職員) どっちかというよりも、両方で学校は活性化するのではないかと思います。私は必由館の卒業生です。勉強を頑張る生徒、部活を頑張る生徒、芸術を頑張る生徒、そういった生徒は自分の活躍できる場所で色々な頑張りをしてお互いを高め合います。それが必由館の理想です。現状の熊本県の風習から考えると、熊本高校、済々黌高校を抜くことは難しいと思います。公立高校で勉強もして部活も頑張りたい、そういう子たちが必由館を目指してきます。必由館の定員を減らして、不合格になった生徒はどこに行くのか、どこに行って勉強するのか、そこも考えたいです。36人学級でスタートして、徐々に減らして、徐々に少人数学級を実現し、現状をよく考えながら改革を進めることが必要ではないかと思えます。

(西 山) 必由館はいい学校です。熊本高校、済々黌高校に追いつくのは無理ですが、私立は学費が高い、必由館は市立で授業料も安く学べます。市民のニーズに合った学校です。そのいいところは残したいです。ただ、今後の少子化にどう対処していくのが大事になってきます。これは個人の意見です。そういう意味では教育委員会の改革は急激なもので受け入れがたいという気持ちはよくわかります。学校提案の案は現状に応じて、少しずつ見直していく必要性を感じています。私たちも教育委員会の意見をゴリ押ししようとしているわけではありません。これからは、現場の意見を聞きながら、どういう方向性が一番いいのかさらに議論が必要となります。

(教職員) 必由館は、生徒が伸び伸びしています。学校の校風が良く感じられ、様々な場面で生徒が主役に、主体的になる、とてもいい学校です。だからこそ、倍率も高いです。生徒も入ってきます。評判の良さで必由館に入ってきます。中学生は口コミで必由館に入ってきてほしい倍率も維持していると思います。確かに子供の絶対数は減っているので、少子化はこの学校も避けられませんが、あえて大幅に変えなくてもいいのではと自分はずごく感じています。必由館に魅力を感じている生徒が入ってくれることも考えますと、それはある意味そういう事ではないのかと思います。また、熊本高校、済々黌高校はとても高い壁です。確かに中高一貫の教育にすると生徒も6年間で学校のシステムも上がり、勉強もしやすい、

私達職員も中学から生徒の成長も見守れる、生徒の指導もしやすく魅力ですが、もう一つ、何か魅力というかメリットがありません。もちろん現在の必由館高校は、生徒たちが一生懸命頑張ってくれてメリットがたくさんあり、とてもいい学校だと思います。私達職員もそのために一生懸命頑張っています、例えば私学には大学もあります。いくら少子化だから中学を創るといっても、必由館に中学ができて志望者がいないのではないかと思います。先日、新聞で玉名・宇土の附属中学校の今年は倍率が高かったと記載してあったが、これまでは低かったです。このような中学校の事例を分析して考えていく必要があります。

(西 山) 以前指摘を受けた点であり、考えていく必要があります。

(教職員) 学校案も、原案も、ポイントが例えば少人数クラス、クラス数というものはいくつか相違点としてあると思いますが、学科の名称とか、普通科がどうかというのは印象は大きいですが、中身で実際何をやるのが重要で、外側は重要ではないと強く思います。普通科が課題であるかという決してそうではありません。中身の部分で何を魅力とするのかという所を明確にしてほしいです。グローバル探究科は専門学科とは書いてありません。普通科という教育課程の中で、何をしていくかが大事です。それが明確だったり特色だったり効果的であれば、名称や制度はそう大きな問題ではありません。その中で、生徒や教職員、地域の要求もあって普通科というのが一定の支持を得て譲らない方がいいのではないかなというようなエビデンスがあるなら、名称は後から検討してもいいのかなと思います。

(西 山) 名称にこだわらず、中身をどうするかというのが大事です。確かにグローバル探究科という名称が刺激的だったのはあると思います。名称にこだわらず、しっかり進路選択ができるよい教育課程ができたならそれでいいのではないかなと思います。

(教職員) グローバル探究科という名前の例で、YMCAと連携した公設民営の大阪の高校があります。新しく創った少人数の学校で、グローバル探究科の単一の学校の中に、グローバルサイエンスコースとグローバルコミュニケーションコースで大きく文と理と入り口で分けるような形ですが、グローバルというのは大きくこれからも普通科であっても必要だろうと思います。その上で文と理の大きなカテゴリーを創っているということです。グローバル探究科という名前が文系に寄っているということでは決してありません。色んな所で実例はあると思います。それが名前が普通科であってもいいですし、中身として先進的だったり、地に足着いたベーシックなものであったりというような、色んな学校の事例を含め、具体的なものが見えるとわかりやすいと思います。熊本の地域性から普通科がベーシックで受け入れやすいだろうというのが、生徒の感触ではありますが、それは中学生にも共通するのではないかなと思います。一番は中学生のニーズを精査する必要があります。

(西 山) 教育委員会が提示しているグローバルリーダーを育成する教育理念について、ちょっと広すぎるかなあという印象は受けます。大学の学部でグローバルを掲げるならいいと思います。高校の教育理念だと大きすぎます。現実的な地に足の着いた熊本市という地域性を考慮した教育理念があったほうがいいと私も個人的に思います。そういう意味で、学校提案の、文武両道の校風のもと、現在の必由館高校の教育理念は非常に理にかなっている印象は個人的に思っているところです。今、先生の話にあったように、学科の名称にこだわらず、中身を良くしていくという考え方であれば、学校提案の普通科のままでいいかもし

れません。ただ、必由館の学校提案でもいいが、改革を随時進めていく姿勢は大切だと思います。今のままでいいということにはなりません。探究的な学びというのはひとつのキーワードとして、これからも推進していく必要があります。それにより、主体的な学びができるような教育を行っていくことになっていくのではないかと感じています。

(生徒) 私は男子ハンドボール部に所属しています。一個人の意見ですが、急激に210名と定員が減ると、甲子園の出場の経験のある野球部や一番部員が多いサッカー部等、元々女子生徒が多い中で、男子部活動の活躍もありましたが、計画では、100名以上減ります。部活動も衰退して、男子ハンドボールやバスケット等、部活の人数が少ない部活は廃部、存続の心配があります。必由館に入ってくる生徒の中には、文武両道を目指し、部活や大学進学がしたいという思いをもって入ってくる生徒も少なからずいます。急激な人数低下は、10年後を見据えたとしても、一番大事なのは手前手前に見ていかないと、急に遠くを見据えたら難しい判断になります。まず一個一個見て行って、学校提案のように、ニーズに応じてその時の風潮に応じて、人数を縮小していく方が良いのではないかと思います。

(西山) 現在男子が少なく、30%位しかいなく、女子の方が多いです。男子を増やすにはどうしたらいいと思いますか。

(生徒) もともとこの学校は女学校ですので、男子を急に入れるのは難しいと思います。入ってきた男子に金銭的な援助をとというのは絶対にできません。高校には期待して入学し、女子、男子の比率関係なく入れますので、3対7という比率をそのまま210名に置いた場合に考えたので、男子を急に入れるのは難しいと感じました。具体的な対策を講じて、本当に実を結ぶかということ効果が出ないと感じます。

(西山) 男子にも魅力ある学校であってほしいです。個人的には男子と女子が半々ぐらいになってほしいです。その点がまだ女子の方が強いというのはどういうことなのかと常に疑問に思います。

4. 主な感想

(生徒) まず最初に必由館のいいところ、学校改革案への生徒それぞれの意見を述べました。その中で、生徒側の意見として、必由館の良い点は普通科だけでなく、国際コース、芸術コース、服飾コース等、多様な学科構成があることによって、様々な学習を行うことができる点を必由館の良いところだと位置づけました。また、学校改革案については、普通科を残すことが大切で、教育委員会と学校の両方が納得するような意見を出していくことが大切だと考えました。西山委員からは、グローバル化の定義や、現在の問題点である少人数制の授業と附属中学校の中高一貫について議論しました。その中で、教職員からは、必由館は文武両道と考えていることや、急激な募集定員の減少による問題点を考え、まず中身を優先すべきだという意見がでました。さらに、同窓会からは、人・モノ・金の問題がある中で、このままだと改革は不安という意見がありました。

自由討議の中では、必由館の特色を優先すべきか、もしくは進学率を優先すべきかという点で協議を行いました。

(西山) 今回の意見交換会で2回目です。強く感じたのは生徒の不安が主に3つあると感じていま

す。1つは、グローバル探究科にしてしまうと、進路の幅が狭まるのではという生徒の大きな不安です。普通科と国際コースの中途半端などちつかずの学科があるんじゃないかという不安を感じています。2つ目は、急激な募集定員の減少からもたらす不安です。特に部活動への影響、男子が少ない現状で、男子の部活動が廃部に追い込まれるのではないか、これは非常に強い不安であると感じました。3つ目は中高一貫教育のイメージが明確に持てないことへの不安です。附属中学を創ることに対する不安、上手くいくのだろうか、中学生、高校生の施設の共用、いろんな課題があるので、高校改革がある程度進んでからやった方が良くないかというごもっともな意見がありました。総じて私が感じたことは、目指す高校像がまだ明確でないような印象を受けます。事務局案の教育理念が「世界的視野と課題解決能力を有するグローバルリーダーを育成する」と、私個人的には遠回りすぎるような気がします。もう少し地に足が着いたような、熊本という立地状況を考えた上での市立高校の学校像を考える必要があります。これは個人的な感想です。目指すべき学校像をもう少し明確にする必要があります。これが今回の一番の感想です。

Cグループ(小屋松委員・苫野委員)

1. 必由館高校を選んだ理由について

- (小屋松) 今回の改革に関連するアンケート結果では、必由館高校を選んだ理由のベスト3が、①通学しやすい、②自分の学力や偏差値に合っている、③行きたいコースがある、というものでした。皆さんが必由館高校を選んだ理由を教えてください。
- (生徒) 受験理由として、入学してからの進路が、自分の行きたい大学に進学しやすい環境があったり、部活動に集中しやすい文武両道の環境が整っていたためです。
- (生徒) 僕も同じように勉強もできて、部活も盛んな学校と聞いたので、自分がやりたいことができる学校だと思い、進学しました。
- (生徒) 私がこの学校を受験した理由は、自分の将来の夢が大学に進学しないと到底就けない職業で、大学に行くためには進学校で、進学校の中では必由館高校が公立の中では施設が新しいのでいいなと思い選びました。
- (生徒) 私がこの学校を受験した理由は、中学生の時に学校においてあったパンフレットを見て、この学校だったら自分がやりたいことができると思ったことが1つと、自分の偏差値に一番合っていて将来に役立てられるような勉強ができると考え、この必由館高校を受験しました。
- (生徒) 私がこの学校を受験した理由は、まず自分は国際コースにいますが、将来の夢が外国の方々と関わる仕事がしたいという夢があって受験しました。また、必由館高校には芸術コースに美術があります。私は美術部で美術のことも美術部担当の先生に詳しく聞けることもとても嬉しく、それで受験したということも大きく一つにあります。

2. 必由館高校に入学してよかったと思うところについて

- (小屋松) 皆さん、それぞれ目的や目標があって入学されたとのことですが、入ってみて必由館高校の良いところはどこだと感じますか。
- (生徒) 先生方が親密に対応してくださって、自分のクラスでは二者面談が最近あり、その中でクラスの状況等も聞いていただけたので、心も体もリラックスできました。先生方の対応がありがたいです。また、私は美術部で絵のことを聞くことができるので、自分のことを言うのも恥ずかしいが、中学校の頃より絵の技術が上がったと思います。嬉しいです。
- (生徒) 3年間必由館に通ってきて、入学当初から3年生までずっと先生方が、我々生徒の興味関心に合わせて、全体でするところは全体でするし、総合的な探究の時間や生徒の質問等、個に合わせてところは個に合わせてくれます。例えば、私は受験生で受験校を選ぶ時にも、一人一人に合わせてたくさんの受験校がある等の、個に合わせて教育を行ってくれたおかげで、個性がとても豊かな学校になったと思います。
- (生徒) 私も話は似ていますが、この学校に入学して一番嬉しいと感じたことは、二者面談や三者面談の中で、自分の将来について話した際に、先生がそれを否定することなく、自分の夢がかなえられるよう、一番いい方法を勧めてくださったことが一番嬉しかったです。

3. 先生方や同窓会の方は必由館高校をどう思っているかについて

- (小屋松) 同窓会の大先輩はこの学校で学ばれて卒業されて、学校の外から見たときに、必由館高校の良さはどんなところだと思いますか。
- (同窓会) 卒業して半世紀になるので、今の教育の細かいことはわからなくなっているが、私たちの時は市立高校でした。市立高校というのでずっと思うのが、その時の校風は今もそのままじゃないかなと思います。生徒の挨拶とか見ても、指導されているというとおかしいが、生徒が自主的かもしれないけれど、教育がよくできていると思います。自分も3年間会長として高校に来ていたけれど、すごく気持ちよかったです。いいところを1つ挙げると、私たちの頃は女子だけだったので、わいわいがやがやでものすごく良かったです。真面目で受験という雰囲気はなく、楽しかったです。
- (小屋松) 現場の先生から見た必由館高校の良さはどうですか。
- (教職員) 在籍15年目です。普通科と芸術と国際、服飾とあって、高校生ながら高校生なりの専門性を高めていて、それぞれ興味のあることを一生懸命深められます。言葉は悪いが、世間ではオタクっぽいと言われてしまうようなことも、できるところがいいです。例えば、堂々と絵を描いたり、裁縫道具で小物を作ったりするところがこの学校のすごくいいところかなと思います。
- (小屋松) 今日、作品などを少し見させてもらったが、非常に素晴らしかったです。
- (教職員) 在籍は8年目です。この高校に来て思うことは、生徒たちの笑顔がいいなということもいつも思っています。それはなぜかと考えたところ、普段からしゃべっているということです。しゃべってなかったら、笑顔であることもわからないです。あと、自分が学校に来ていいなと思うことは、本校の健康教室前に、私の似顔絵が大量に貼ってあって、入試の時の点数はちょっと低いです。ただ、自己肯定感を高める声掛けをいつもするようにしています。それがよかったのかわからないが、私によくしてくれて、健康教室前の絵もそうであるし、書道部の子どもたちも私の名前を書いて、それをラミネート加工して、昨日8人からもらいました。生徒と教員の距離も近いと強く感じます。
- (教職員) 自分は在籍3年目です。芸術コースで担任をしています。自分自身、音楽を専門で習い大学に行く時には、学校外で習い事として専門でやらなければならないというようなことも、本校では学校の授業の中で堂々と学ぶことができます。切磋琢磨できる仲間がいるので、悲しい気持ちも経験するが、悲しさを経験することも含めていい学びができます。音楽・美術・書道、芸術と言っても全く質が違うので、持っている素地も個性も違います。それらが混ざり合う認め合える空間があることがいいです。
- (教職員) 在籍8年目です。施設がきれいなことやコースに分かれていることは、それはあくまで大人が見た必由館のよさです。本当の必由館のよさというのは、生徒が話した言葉かなと思います。それぞれの先生が個々に対応してくれます。実際に昨日英語のプレゼンで、5時まで一緒に練習した生徒もいます。また、生徒指導と英語を担当していますが、ある子には、運営の仕方や話し方を説明しているので、保健委員長として頑張っています。それぞれの先生がそれぞれの分野で、自分の力を発揮しているというのが、生徒も実感していると思います。自分自身も日々体感しています。

4. 必由館高校に通う子どもたちの変わったと思うところについて

- (小屋松) 先生方は、長くこの学校に在籍していて、多くの生徒を見てきたと思いますが、必由館高校

に通う生徒の状況が変わってきたなと思うところはありませんか。前と今とで変化はありますか。

(教職員) 大きな時代の雰囲気の影響されていると思います。根本的には人なつこくって、やる気があって、運動が好きで、でも大学も行ってみたいというのがあって、やりたいことがいっぱいある子の集団というのは変わりません。あとは、少し身だしなみをきちんとしようという風に学校側が考えて指導している時は、素直に納得しているのかわからないけれど、きちんとしていくと周りからも褒められるし、とても見た目も上品で自然に素直にしています。昔なら反発していたかもしれないが、ここ数年の傾向としては、素直な子どもが多いという印象が強いです。

(小屋松) 校長から見てどう思いますか。

(校長) 必由館高校を見ている段階から、伸び伸びしている生徒が多いというのはありますが、自分がここに教頭・校長として勤務する中で、先生たちにも自分の夢を追い続けられる学校であるというのをモットーにやってきて、それが十分生かされてきているという思いは強いんです。今の時期は3年生の進学的面談をしています。いろんなことをいろんな先生たちが自分のスタイルで教えている中で、成長しているのが実感できています。とても素直に育っています。これが普通科だからできることという思いがすごくあります。

(小屋松) 私達も、外から見ていて、必由館高校の校風といいますか、今言われたように素直な生徒が多いなという雰囲気とか、学校全体としてバランスが取れているなど、良い意味で感じています。

5. 普通科にこだわっている理由について

(小屋松) 今回は、学校改革ということで皆さんの前に課題が降ってきたような状況です。今、校長先生からも、普通科ならではの良さがあるのではとのことでしたが、皆さんのアンケートを見ても、普通科に強い思い(発言は「こだわっている」)があると感じました。その辺を皆さんに聞かせて頂きたいです。今回、教育委員会の事務局の案として出ているのは、グローバル探究科と芸術探究科という表現に変わっていますが、そういう案が出てきたところに皆さんの方で検討した結果でいうと、普通科という名称が非常に皆さんにとっては一番抵抗のない志がずっとあるものかもしれませんが、そこにこだわる理由というのは特別ありますか。何かあったら教えて下さい。

(生徒) 今年2月ぐらいに見て、一番最初に思ったことが、グローバル探究科5クラスという部分を見た時に、今の国際コースは女子の割合がすごく高くて、人数の話の前に、グローバル探究科コースは、今の国際コースに似たようなクラスが5クラスできた場合に、その通りになるかはわかりませんが、女子が多くなるだろうと思ったため、自分が部活動をしていることもあり、盛んに男子もたくさんいて、部活動をやっている中で、男子の人数が減り、部活動が衰退していくのではないかと思いました。そうしないために、どこの高校も普通科の良さとして入ってから基本的なことを学び、それから自分の好きなことを学べます。確かにこれからグローバル化していくことは大事な部分であることはわかりますが、そこに突出しすぎて今ある部活動の良さであったり、男子と女子がたくさんいるという多様性の部分が少なくなってしまうのかなと思います。探究することは大事ですが、普通探究の中で、グローバルに学びたい人はグローバルにすればいいと思います。入ってからで

も意図としては問題ないのかなと思います。入ってくる時に女子も男子も今まで通りに普通科という名前があった方が、受験生としては入ってきやすいのかなと思います。

(小屋松) 今の国際コースには女子生徒が多く、グローバル探究科が国際コースと近いものとして認識されたため、イメージとして、男女どちらにも門戸が開かれている印象が良いということでした。しかし、グローバル探究科は、今の国際コースをそのまま引き継いだものではなく、普通科からもう一步踏み込んだ学科というイメージでした。表現だけで見ると、普通科の方が馴染みがあり、より広く構えるという意味ではその方がいいような気がします。

(生徒) グローバルを見た時、自分が必由館を選んだ時には、将来の夢をかなえるには何をしたらいいのだろうとすごく迷いました。理数科とか英語科とか、どの道を究めればいいのかってなった時に、普通科というのが、一番何もわからない状態で、やりたい職業とか、やりたいことがない人が入ってくるのが普通科かなと思います。今、受験の時の高校一覧のパンフレットを見たときに、グローバル探究科といった、少し変わった名称を見た時に、これは私が進んでいいのかということや、私が入っていいのか等、単純になってしまうけど、名前だけで判断してしまって、この高校はやめようと思う子がいたりするかもしれないと思います。実際に自分もこの学科は合うかなと思ってしまって、やめてしまったことがあります。普通という名前があると、誰でも、私何もわからないけど、じゃあ、ここなら行けるかなと思って入ってきてくれるかなと思います。

(小屋松) 高校生に進学する段階では、まだ将来何になりたいかはっきりと目標が決まっていない状態で、高校に入って学んで見つけていくという人が多いですが、普通科であれば入ってから学びながら決めていけるという印象を持っていますが、グローバル探究科となると、より専門的で狭く感じるということですか。その点はきちんと説明しなければいけないと思います。

(教職員) 自分が英語科に所属していて、今国際コースの担任をしています。例えば、20年前なら国際コースという名前から、英語を中心として、英語を主軸に勉強できるということはわかります。今はクロームブックを配備してもらったこともあって、グローバルがスタンダードになっており、グローバルという文言を付けても当たり前になり、グローバルが普通でしよとなってしまいます。グローバルな時代なのに、あえてなぜピックアップするのかという印象を受けます。今は芸術コースも服飾コースも、グローバルがスタンダードです。海外の技術とか絵とかデザインとか勉強しているので、わざわざグローバルという文言を付ける理由にはならないのではないかと思います。

(教職員) 自分は2年の理系の担任をしています。数学を教える時も、言葉の定義をしなければいけません。定義の前に、言葉からどんなイメージを持つのかということに気を付けています。語感は大抵だといつも言います。予習もできないので、そういう風にいつも言うが、そんな時、普通科という言葉の語感と、グローバル探究科という言葉の語感、特に生徒もこの学校を受けるのかということを考えていると思います。保護者も考えていると思います。そうなったときに、保護者がグローバルという言葉を見て、どんなイメージを持つのかということに強く感じています。今まで本校は普通科できているが、普通科だったら普通科出身の方が多いので、こんな感じなのかなというイメージがわきやすいです。だからこそ、この学校は競争倍率も高いと思います。それが、グローバル探究科という名称に変わってしまうと、「グローバルって何?」となります。人によっては、グローバルがスタンダードになってき

ている時代なのだという意見もあれば、グローバルって何それ？という保護者もいます。そうになったら競争倍率が減るのではないかと、私個人としては思っています。

(小屋松) 今までなかったことがいきなりポンと出てくるわけだから、普通科という事を考えなければならぬと思います。保護者の方もこれから必由館を目指そうとする子が出たときに、どうしたものか。それによって、志願者が減るのでないかということですか。

(教職員) 志願者が多いという定員を充足しているということからくる活発な活動があるということが、この学校を支えていると思います。

(苫野) 倍率や定員充足率は非常に大事です。個人的には、今時学科名にグローバルを付けるということには少し抵抗があります。ただ、求めたいのは広く世界を知り、今大きく変わっている世界で何が起きているのかに目を向けて、足元から行動していくという思いが込められた名前だと思います。名前はこれから考えれば良いが、倍率に関しては、今全国に3,600校ある公立高校が、年間約60校が統廃合されています。今後10年で大体6校に1校が無くなると言われています。この現状を考えると、必ず定員割れが起こり潰れる学校が熊本でもたくさん出てきます。これは自然の成り行きなのでどうしようもないことです。そこで、潰れてもいいかという道を選ぶのか、必由館もそうなることではないが、この10年6校に1校だから相当な数が無くなります。必由館高校はとても良い学校であるからこそ、今後起こる統廃合の問題意識が見えにくくなるかもしれません。既に危機感を持っている学校は、死に物狂いで変わろうとしています。こういう点で、今後10年で差がついてきます。逆に言うと、この対話の場は大事なことで、このままここに示されている案にしようという話ではなく、今持っているリソースを使いながら、ゼロベースで考えることで、今の魅力を引き継いでさらに魅力的な学校を作っていくいい機会だと思います。必由館高校はとても良い学校だということはよくわかっているのです。この後必ずやってくる大淘汰時代に、市立ならではの特色をゼロから考えていきたいです。

(小屋松) 今後の学校の在り方を考える良い機会だと思います。ここに出されている案が前提の話ではないことを誤解のないようにくれぐれも理解してほしいです。

6. 中高一貫について

(小屋松) 色々キーワードが出ているが、中高一貫についてはどうか皆さんに聞きたいです。中高一貫となると中学生から高校生まで連なってやっていくわけで、今回の案で行くと、高校の定員にも影響が出ているので皆さんのなかでも抵抗感があるかと思うが、どのように考えますか。

(教職員) 中高一貫を進める理由というのは、今後必ず定員割れするという被害をできる限り少なくするために、生徒をあらかじめ確保するのだという捉え方でいいですか。

(小屋松) それよりも特色ある教育をするということが、いずれ問われてきます。その時の一つの選択肢として、中高一貫教育があるという捉えの方がいいです。

(苫野) 個人的に大事にしたいのが、後ろ向きの改革は誰も嬉しくないと思います。わくわくする未来を描きあっていきたいです。中高一貫のアイデアも後ろ向きでこうしないと生き残れないからするというものではなく、中高一貫が効果を上げているといういい事例はたくさんあります。6年間を通じた探究活動ができることや、6年間ごちゃまぜの異年齢がいることで、例えば中学1年生が高校3年生を見て、頼もしいお兄さんお姉さんを見ることは、自

分の指針にもなります。高校生が中学生を見ることで、年上の自覚を持ちます。探究活動をとっても、途中で受験勉強のために探究を止めようとならず、じっくり6年間をかけて取り組むことができます。中高一貫を一つのアイデアとして、これを市立高校として魅力化の1つとして捉えられるといいと思います。わくわくベースでいっていきたいです。

(生徒) 私が意見を出した時に、中高一貫のアイデアというか観点ではなくて、中高一貫を設置するまでのスパンが急激すぎて、ちょっと待ってほしいという意見が出ています。中高一貫のメリットとしては、3年間より6年間行える探究活動のほうがもちろん質が高いです。その分先生と生徒の関係が親密になるため、6年間同じ環境だけど、もっと質のいい教育が引きだせると思います。そういうことで、中高一貫を仮に設置することになったとしても、エスカレーターで入学する人を見たときに、少子化の背景で、学校全体の魅力化もはかかっていかなければならないとなった時に、高校自体の魅力が必要になります。魅力が成功して熊本全部が必由館高校っていいよねという魅力が伝わった時に、中学校から入りたいから中学校に行く流れになっていきます。中高一貫を設置するなら、高校の改革をしていって、高校の魅力化を図って、例えば、グローバルな探究をしていくことが成功したとしたら、中学校を設置するといいと思います。私が中学生の時には、高校の具体的なコースの違い等までは分からないが、例えば女子が多くてこういう学校だよねということぐらいはわかります。その評判がとてもいいものになれば、偏差値だけじゃなく、サッカーしたいから行きたい、こういう学習ができるということが広がれば行きたい学校に変わっていき、前向きな改革に変わっていきます。中高一貫というアイデア自体はいいですが、高校の魅力化や実績、評判、空気感を作ってから行うといいと思います。

(校長) 中高一貫に関しては、6年間というが、高校入学者からすれば3年間のスパンです。高校から入る生徒には、中学から学んでいる生徒に追いつけるのかという不安が存在しており、中学校の倍率は高くても、高校の倍率に反映しない学校が多いです。それもあって東京都は中等教育学校に移行しています。このような状況で中高一貫という話が出てきたので、それは違うのではという思いが強かったです。どうしても後から入ってくる子どもたちが、先に入学している子に追いつかないといけないと感じます。多くの中高一貫校で、6年間のグランドデザインは提示されていても高校3年間のものは提示されていません。中学生や保護者は、高校から入ってくる生徒が3年間で追いつかないといけないのではニーズが高くないのではないかと思います。学校の中でとても苦勞してるのがみえます。熊本市には中学校がこれだけあって、そこから学んできた子を責任もって育てるといった思いが強かったので、長い目で見るというよりも、中高一貫については厳しいという思いがありました。

(小屋松) 今回生徒会でも中高一貫について色々と考えたと思いますが、全国にある中高一貫校のことを調べたりしたことがあれば教えてほしいです。今校長からもありましたように、中高一貫校だと、中学から入った生徒と、高校から入ってくる生徒がおり、そのギャップが懸念の一つだという意見もありますがいかかでしょうか。

(生徒) 中高一貫は私立の高校のイメージです。公立でも中高一貫をしてしまうと、私立の中高一貫の強みや魅力がなくなってしまうのかなと思います。そういった配慮とか遠慮があります。

単純に高校生という響きの方が、中学生よりもザ・青春というか、より青春というか、高校3年間で学生の中で一番楽しいものであります。それを中高一貫にしてしまうと、楽しい高校生ライフというものがなくなってしまいます。

(苫野) 東京都だと選択肢が多いから、今出された意見のようなことが起こります。熊本で同じことが起こるかといったことは、まだわからないから調査が必要です。私も中高一貫教育でしたが、青春でした。中1で高3のあこがれの先輩がいたりすると、それはもう青春です。そのようなこともあったりするので、そこはもうちょっと調べてからがいいと思います。危ないところもあるかもしれません。

(同窓会) 中高一貫校でも中学生が少ないです。後で入学してくる生徒と混じってくると思いますが、教える先生方も苦勞が出てきます。また、中学校で入ってきた子どもたちは、そのまま高校に入るのかわからないです。テストもなくストレートに入れることになっていますが、もし中学校でやめていく子が多かったらどうなっていくのだろう、そういうことを考えます。

(教職員) 中高一貫校で高校から入りました。私立だったが差は感じませんでした。空気は最初はやっぱり違ったが十分楽しかったです。ただ、懸念するのが同じ校舎の同じ階に中学生がいたら、高校生もやりづらいたろうが、中学生の発達段階、色んなことを考えると指導がとても大変になるのではないかと思います。いろいろな複雑さが生まれてくると思います。

7. 主な感想

(生徒) まず、グローバル探究科への考えを話し合いました。私たちの案では、グローバル探究科だと中学生から見て詳しく説明しないとわかりません。普通科だと保護者の方も普通科に入っていた方が多かったので、理系から文系を選べますし、様々なことがあります。次に附属中学校については、附属中学校では6年間通学するとしたら、中学1年生から高校生にあがるとしたら、中学生からの友情というものがあるって、外部から入学する人からすると、不安に思うところが多くあると思います。ルール等も複雑になってくると思いますので、その辺を考えました。附属中学校については、高校の改革が終わってから考えた方がいいという意見が出されました。

(小屋松) まず、このグループで必由館高校の良さって何ですかということを皆さんに聞いてみました。その結果、私を感じたのは、非常に生徒と先生間の親密さが強いなと感じました。それとこの校風に出てきているなという風を感じました。もう1つはこの必由館高校の特徴と言えるかもしれませんが、芸術コースとかあるいは服飾デザインコース、専門のその分野の学科があるということで、専門学科ではないけれども、入った生徒さんが非常に触発されて、自分の高校生活が豊かになっていくんじゃないかという、そういうことを感じます、ということをおっしゃっていたので、これも必由館高校ならではの特色じゃないかなという非常にいい面がたくさんある学校だという印象を持ちました。

それから具体的な内容としましては、やはりこの普通科の普通の捉え方というのが、ちょっと私が最初は持っていたイメージでは少し消極的で後ろ向きではないかなという風に思っただけでここに来ましたが、聞いてみると、普通の捉え方がやはりどちらかという前向きに捉えていらっしゃるんだなというのを感じました。特に、グローバル化とのグローバルという要素の対比でいきますと、返ってグローバルの方が普通じゃないのというか、一般的な標準の言葉じゃないのという意見が出るぐらいで、その標準という言葉の意味が少

し違ったみたいな形の中では捉えることができたというのが収穫でした。

この学校の必由館高校らしさというか、いいところはたくさんある学校です。非常に安定もしてますし、ここをやっぱり伸ばしていくということはですね、この学校改革の大きなあの柱になっていくような気がしました。今後ここにも色々な案が示されてますけれども、学校内で色々議論していただいて、生徒さんとも色々議論していただいて、一緒にまたいい学校作っていくという、そういったことでは共通ですので、また今後一緒に力を合わせてやっていきたいと思います。

(苦 野) 少し遅れて参加したが、もっと話をしたかったなと思いました。このフラットな対話の場というのがすごく居心地が良く、やはり肌で学校の良さというのを感じられました。生徒さんの発言も、先生の発言もとても伝わってきました。

面白い研究があって、私たち交流とか対話がないと何が起るかっていうと、どういうことも偏見をためていくんですよ。相手に対してこうじゃないかと、どんどん偏見をためていくんですけど、じゃあどうやったら民主的でお互いを理解しあって親和的なコミュニティを作れるかっていうとたった1つ交流なんですよ。これはもうはっきり分かっているんですよ。対話を重ねて交流すると、何だ同じようなことを考えたのか、とか、みんなおなじ人間なんだとか、そういったことが見えてくる。そういう会を重ねるっていうことが、とても大事ななということを思いました。そこで、大事なのは私たちみんな必由館を、熊本市の教育を、もっと素敵に、もっともっとわくわくする学校にしていきたいということは共有しているので、そこをあとどうしたら一緒に頭を合わせて考えられるのかなということを考えていきたいと思いました。

1つだけ、ここでお話しした情報を共有だけなんですけれど、一応みんなが背景として知っておいた方がいいかなと思うことは、今公立の高校って全国3,600校あるんですよ。で、年間60校ぐらいが統廃合をしているんですよ。で、今後10年間で6校か7校に1校がなくなる。そういう現状なんですよ。だから今は定員充足してるし、倍率もそれなりにあるけれども必ずやってくる未来なんですよ。

必由館がなくなるというわけではないけれども、熊本でも6校に1校ぐらいなくなっていくわけです。だから、今、余裕があってみんなとってもいいこの学校だから、もっともってこの学校の良さを生かしていくための、さっき西山委員がおっしゃったような、どんな学校を作っていくんだらう、どうしたらもっとみんなわくわくできるんだらう、ということを前向きに考えることで、後ろ向きは、教育委員会が言ってきやがったからとか、そういうのはもうなしにして、みんながいい学校をどうやったら作れるかなと考えたいなと思っています。

ちょっと対話の時間が短かったので、高校生の皆さんとももっともっと個人的にでもいいので、先生ともお話することができたらなと、今日すごくたのしかったので思いました。また是非そんな機会を持たせてください。